

# 自由われらの園 国府高校100周年

太平洋戦争(一九四一〜四五年)が激化するにつれ、豊川市の国府高等女学校では授業に代わり、勤労作業の日数が増していった。当初は農作業が中心だったが、女学生たちは次第に市内に造られた巨大兵器工場・豊川海軍工廠の働き手として動員され、機銃や弾丸などの生産にあたった。

四五年四月には学校工場化が始まり、国府高女の校舎の一部が兵器の生産拠点として使われるようになった。工廠に動員されていた女学生の中には、学校に戻って働く者もいた。

その一人、当時二年生だった小野寺万知子さん(へむ)は豊川市御津町。八月七日朝、いつものように学校の講堂で作業をしていた。そして、窓の外に米軍機の大編隊が爆音を響かせて飛んでくるのが目に入った。

め、空襲から間もなくして負傷者を受け入れる病院となった。

創立六十周年記念誌に収められている元教員の手記に、当時の様子が記されて

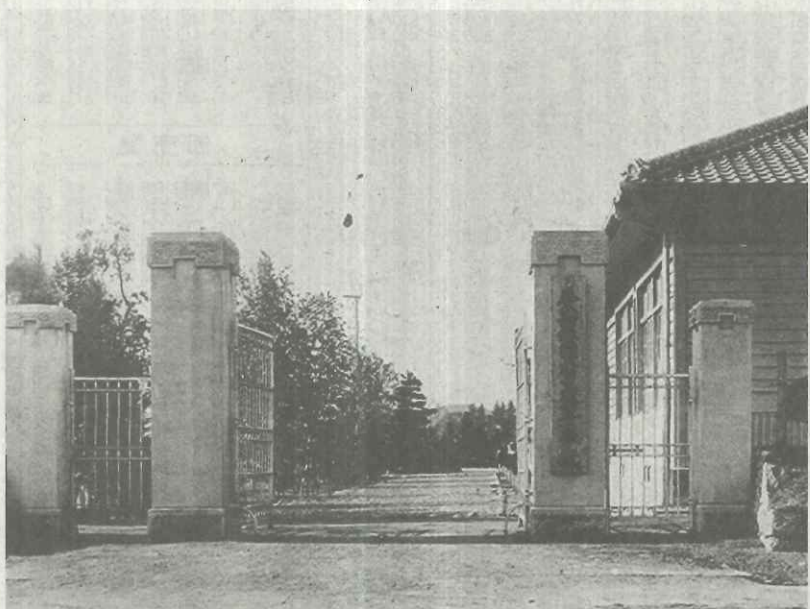


## 歴史編② 豊川海軍工廠への空襲

鎮魂の句が刻まれた「朱夏之碑」  
豊川市の国府高で

# 教室に畳 学校は病院に

いる。「教室という教室は声、麻酔なしで手術するた畳が敷かれ、負傷者はその上にござ、ござ寝かされていきました。理科室は手術室になっていました。負傷者のわめき声、苦しみ叫ぶ声、小野寺さんは正門で、工廠から逃げてきた人々に駆け寄り、水を、水を、水を下さい」と必死に叫ぶ。小野寺さんは正門で、工廠から逃げてきた人々に駆け寄り、水を、水を、水を下さい」と必死に叫ぶ。



国府高等女学校時代の正門=国府高提供

「つえをついて来た人、血だらけではいつくばって来た人もいた」。校舎の外には手術で切断されたとみられる負傷者の手や足などが積んであったという。小野寺さんは後日、同級生と一緒にこれらを担架のようなものに載せ、運んだのを覚えてる。

空襲では、女子挺身隊や動員学徒十代の若者を中心に、二千五百人以上が犠牲になった。国府高では、後に統合した豊川市立高等女学校の女学生を含め二十八人が命を落とした。終戦後、学校は四五年九月に再開されたが「あの人が亡くなった、この人が亡くなったと聞きました」と小野寺さんは述懐する。

校庭の一角には八九年十月、創立七十周年を記念した句碑「朱夏之碑」が建立された。工廠に女学生を引率した元教諭で俳人の故太田鴻村さんが、これから花咲くはずだった女学生たちへの鎮魂の祈りを込めて詠んだ句「蘇る 樹頭の華や 朱夏の天」が刻まれている。